

---

## 昭和後期の福岡の筑前琵琶史

### ——筑前琵琶保存会発足と嶺旭蝶——

山本百合子 福岡教育大学教育学部准教授・愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師

---

#### はじめに

特定の地方名を冠しながら一地域の民俗芸能の域を越え、日本の伝統芸能史上に古典的なジャンルとして登場する「筑前琵琶」という種目が、筑前すなわち現在の福岡県に所縁のある人物らの活躍によって20世紀初頭に琵琶楽の新たなスタイルとして成立した経緯は、拙稿「筑前琵琶研究史序説」<sup>1</sup>において辿ったところであるが、その筑前琵琶の福岡における展開を追うなかで、令和元(2019)年11月、福岡で筑前琵琶の普及と伝承に携わる奏者の一人が急逝した。現代の筑前琵琶は、筑前琵琶の創始者初代橘旭翁(1848～19)が明治42(1909)年に創設した「旭会」と、旭翁の養子橘旭宗(1892～1967)が大正9(1920)年に分派して創立した「橘会」の、大きく二流派によって伝承されているが、一昨年急逝した在福の琵琶奏者青山旭子は、旭会の慣習である「旭」の字を載せた芸名の奏者として歩みながら、近年は福岡旭会とは別団体の「筑前琵琶保存会」の二代目会主を務めていた。旭子の急逝により筑前琵琶保存会の会主は三代目寺田蝶美に引き継がれたが、現在この保存会に参加する奏者の多くは、芸名として自らの師匠(もしくは自らの師匠の師匠)である嶺旭蝶(1911～99)の「蝶」の字を載せた雅号を名乗り、一部では自分達を「嶺派」とか「嶺清流」と呼ぶ向きもある。というのも、福岡の筑前琵琶保存会とは、昭和40(1965)年、在福の筑前琵琶の名手であった嶺旭蝶の主導のもとに発足した組織で、言わば全国区の組織である旭会・橘会とは別に、地元福岡を中心とする地域社会に根ざした筑前琵琶の演奏や楽曲の創作／伝承を主体に活動している団体であり、発足時に第1回だった定期演奏会は、発足から55年となる2020年に第56回を催している。

本論文では、大正から昭和初期に大流行しながらも第二次大戦の前後に急速に下火になった筑前琵琶を復興しようと、昭和40(1965)年に発足した筑前琵琶保存会の50余年の活動の初期とそれを率いた一奏者にスポットを当て、福

岡における筑前琵琶の展開の一部分を紹介する。

## 1. 九州筑前琵琶保存会の発足

昭和 40(1965) 年の発足当時、筑前琵琶保存会は「九州筑前琵琶保存会」という名称で立ち上がり、3 年後から現在の名称となっている<sup>2</sup>。興味深いことに、この団体は、筑前琵琶という芸能の保存や伝承を目的としながら、発足当初のその組織構成員には筑前琵琶の演奏や教習を生業とする（いわゆる玄人の）奏者達は含まれていない。筑前琵琶を趣味で習い嗜んでいるか、あるいはその鑑賞を好んでいる



筑前琵琶保存会 発足時の写真

各界の名士や有力者たちによって結成され、結成された保存会という組織が奏者を招いて演奏会を催すという仕組みであったようである。「結成大会／記念演奏会」と冠して昭和 40 年 11 月 22 日に福岡市中町（現在の博多区中洲）の明治生命ホール（現 明治安田生命ホール）で催された第 1 回演奏会のプログラムには、保存会々長として衆議院議員で後に福岡市長となる進藤一馬、副会長として藤二雄の名前があり、以下、構成員である「顧問」として当時の福岡と東京の政財界の名士達の名前が並んでいる<sup>3</sup>。在福の筑前琵琶奏者の演奏活動を支えることを主眼とするこの組織の当初からの性質や人員構成は、現在も若干変化しながらも継承されており、現在の保存会々長も通産省他の官僚から福岡県知事を務めた麻生渡、名誉顧問に現福岡県知事と現福岡市長、そして 20 余名の顧問として福岡に所縁の深い政治家・会社重役・文人・芸術家（琵琶奏者以外）などの有力者の名前がある。今でこそ保存会の定期演奏会に出演する琵琶奏者は、賛助出演者を除いては保存会の「会員」となっているが、現プログラムに掲載されている当団体の運営組織を構成する約 30 名の役員（会長・名誉顧問・顧問・相談役・会主・理事・事務局）のうち、玄人の琵琶奏者は「会主」の寺田蝶美のみである<sup>4</sup>。

この団体がどのような経緯で発足したかについては、金子厚男による筑前琵

琵琶者嶺旭蝶への聞き書きの著書に言及がある。それによれば、結成時の組織構成員には名前の含まれていない、当時の在福の奏者の一人で、卓越した人気と実力そして人脈を備えた嶺旭蝶を中心とする何名かの奏者達の発意と働きかけにより、筑前琵琶の奏者の活動の後ろ立てとなる後援団体が成立せしめられたという経緯のようだ。なかでも嶺旭蝶は実際にこの組織の発足をかなり強く促した存在であったとみられる。

以下に、金子の著書から旭蝶の言葉を引用する<sup>5</sup>。

(旭蝶談)…半ばあきらめかけとったところに、趣意書が届いて、藤二雄さんを紹介して下さった。この人に奔走していただいて、地元でも高野旭嵐、中村旭園とといった協力で、発足にこぎつけることができました。うれしくて涙がこぼれました。

保存会発足への嶺旭蝶の強い思いが感じられる言葉だが、もちろん保存会の発足は一人の奏者の意思だけによるものではなく、当時の福岡周辺の筑前琵琶奏者の多くがそうしたものを望んでいたことが、第1回のプログラムに掲載されている旭会三代目宗家橘旭翁の「感謝のことば」からも読み取れる<sup>6</sup>。

「本市を発祥地とし、優雅典麗の歌詞を以て知られる筑前琵琶は、博多の芸能であり、福岡県が誇る古典芸能の一つであります。ところが時代の流れは新しいものを生み出すと同時に古いものを置き去りにしてゆく。“残さねばならない”と認められたよいものも、ときにこの“おきて”を免れない。筑前琵琶もいまこの運命をたどって時の流れから取り残されようとしています。このときに当たり、福岡市、並びに在東京の有識者の皆さんよって保存会が設立されたことは誠に感激に堪えません。この後は“再起躍進”筑前琵琶発展に懸命に尽したいと思えます。この上とも宣敷く、御援助のほどお願い申し上げまして、私の挨拶と致します。」(原文ママ)

当時、旭会所属の一奏者であった嶺旭蝶の主導で発足にこぎつけたこの筑前

琵琶保存会に対し、旭会宗家が感謝の言葉を述べ、福岡で筑前琵琶奏者が結束してその伝承普及活動を再び盛んにしたいと願っていたことがわかる。

## 2. 昭和期の保存会定期演奏会の動向

昭和30年代の在福の筑前琵琶奏者達の念願がかたちとなった保存会の主催で始まり、その後現在に到るまで催され続けてきた定期演奏会において、演奏した出演者や演奏された演目、それらの変遷を把握し、保存会によって普及され伝達されてきた琵琶楽の種類や楽曲、関係者の交流、そこにみえる保存会の役割と筑前琵琶の動向などを掴んでみたいと考え、現保存会々主の寺田蝶美の協力を得て、これまでの保存会主催演奏会のプログラムの全容の確認作業を行っている。初期の第1(1965)・4(1968)・8(1972)・9(1973)回のプログラムの所蔵者を見つけられず、その4回については原資料を確認できていないが、昨年(2020)実施された第56回定期演奏会までのプログラムのうち入手できた約50点から、出演者や演目のある程度俯瞰することができた。現時点で確認できている情報を集約し、本論文の資料としては昭和の年代までを一区切りと考え、昭和63(1988)年の第24回定期演奏会までの状況を表に示したのが【表】である。プログラムに記載の情報が限られているため、演奏された楽曲の作／編者や出演者に関しては、他の資料や寺田への聴き取りも行いながらの作業になっているが、保存会発足から20数年間にも、時期によって様々な動向を見出すことができる。

### (1) 出演者について

まず、出演者に関して、【表】から読み取れる、時期毎の傾向やと特徴を指摘してみる。

- ① 保存会発足から第7回までの筑前琵琶奏者には、福岡県内の各地(福岡・小倉・戸畑・筑紫)に加え、近隣県の熊本や、中国地方や近畿地方の広島・神戸・大阪、さらに東京からの奏者も含め、遠来の出演者が多く見られる。
- ② 第5回までは、その年の旭会全国大会への出演者による出演曲の紹介が見られる。
- ③ 第5回より、学生の同好会(九大邦楽部)、一般の文化サークル団体(西日

本文化サークル)が出演している。

- ④ 発足当初から、筑前琵琶だけでなく、薩摩琵琶・錦琵琶・錦心流・講談琵琶などの異種琵琶楽の奏者の客演が見られ、第6回以降は、ほぼ毎回薩摩琵琶の鶴田錦史系(鶴派)の奏者が客演に来ようになっている。
- ⑤ 日本舞踊の舞踊家や、琵琶以外の声の表現(浄瑠璃・講談・詩吟・演歌・ナレーション)などとの共演も、コンスタントに行われている。
- ⑥ 第10回以降、嶺旭蝶と青山旭子の弟子と見られる子どもの出演が急増し、第12回には「少年部」という括りもみえる。
- ⑦ 第10回以降、洋楽や電子音楽の奏者の出演も見られるようになる。
- ⑧ 第15回頃より、出演する琵琶奏者の人数が急増し、第18回には総勢42名による演奏がある。

## (2) 上演内容について

続いて、一覧表から、上演された演目や曲目について注目できる出来事や傾向を整理してみる。

- ① 第2回には、筑前琵琶の開祖とされる橘智定(初代旭翁)の琵琶楽の源流である天台宗玄清流の盲僧琵琶による法楽を行っている。
- ② 第7回までの各回に上演された筑前琵琶の楽曲は、旭会伝承曲である初代から三世の旭翁の作品が殆どである。
- ③ 第2回に見られる茶道との共演、第3回から見られる日舞や文楽演者との共演、祭囃子との共演、第5回に見られるお笑い(演芸)との共演、第10回から見られる詩吟との共演など、演目全体の中に、当初からほぼ必ず一つ以上の琵琶歌以外の伝統的なパフォーマンスが取り入れられている。
- ④ 第10回には電子音楽、第11回にはピアノ伴奏による少年合唱、第12回にはヴァイオリンなど、第10回以降は洋楽系のパフォーマンスとの共演も試みられるようになる。
- ⑤ 第10回から、筑前琵琶の楽曲には嶺旭蝶の作編曲作品が大幅に増えている。
- ⑥ 第6回から、筑前琵琶曲の中に、複数の奏者による物語登場人物の語り分け表現の作品が見出せる。
- ⑦ 第15回頃から、琵琶十数名以上の編成の大合奏曲が上演されるようになる。

【表】筑前琵琶保存会 昭和期の定期演奏会 プログラム記載内容

※ グレー部分は所蔵不明により未見

回・年	演目名	作詞	作曲	演奏者・編成・作品に関する情報
第1回 昭40(1965)				
第2回 昭41(1966)	蓬萊山		薩摩琵琶歌の移曲か?	3名(福岡)
	淀君	不明	不明	2名(熊本)
	新曲 秋風の故郷の山	橋 旭翁	橋 旭翁	3名(福岡)
	粟津が原	橋 旭翁	橋 旭翁	2名(戸畑)
	玄清法流琵琶法楽			天台宗玄清法流僧(導師) 琵琶・太鼓・拍子木・鐘拍子
	新曲 娘みゆき	吉賀 敬吾	橋 旭翁	2名(戸畑・筑紫の連合)
	新曲 若き敦盛	西条 八十	橋 旭翁	6名(小倉・福岡の連合)
	茶絃録	河原 杏子		琵琶(旭園・旭蝶)・箏(深海澄子) 茶道お点前(小笠原古流7名)
	新曲 未練西行	吉賀 敬吾	橋 旭翁	独演(東京)
	遠 実朝	池上 作三	山崎 旭萃	独演(広島)
耳なし芳一	白水 湖水	水藤 錦城	錦琵琶(東京)水藤錦城	
沖繩の天	原作 波多江五兵衛	構成 角田 喜久	8ミリ作品 映像(彌武雄) 筑前琵琶2名(旭蝶・旭園)・ナレーション付	
第3回 昭42(1967)	新曲 良寛さん		橋 旭翁	4歳・5歳 大人2名(福岡)
	菊の礎			2名(福岡)
	新曲 森坂寺	網谷 一才	三世 旭翁	旭静・旭艶・旭蝶・旭園(福岡) 義太夫「壺坂霊蹟記」に取材した作品
	那須与一		一世 旭翁	旭奏・旭澄・旭園(福岡)
	新曲 秋風故郷山	橋 旭翁	橋 旭翁	新人(全国大会出演)・旭園(福岡)
	新曲 お蝶夫人	大沢 逸足	橋 旭翁	日本舞踊花柳立方1名・琵琶2名(熊本)+4名(福岡)
	小栗栖	早川 紫陽	一世 旭翁	2名(小倉・戸畑)
	大物の浦	大沢 逸足	二世 旭翁	2名(神戸)
	新曲 舞扇鶴ヶ岡	吉賀 敬吾	橋 旭翁	4名(大阪)
	青の洞門	大坪 重二郎	二世 旭翁	独演(神戸)
新曲 巡礼お鶴	西条 八十	三世 旭翁	6名(福岡)+立方 今津文楽人形社中	
父帰る			講談琵琶(東京)若水桜松 尺八(長沢*翁) *兄の上に点二つ	
大合奏 博多どんたくばやし			全員・平田浜月社中特別出演	
第4回 昭43(1968)				(平成50年)
第5回 昭44(1969)	ご祝儀 こっけい琵琶			吉塚貞賢堂 特別出演
	新曲 秋風故郷山	橋 旭翁	橋 旭翁	九大邦楽部生1名+旭園
	敦盛		薩摩琵琶歌から移曲?	7歳と旭清
	五条橋	三世 旭翁	三世 旭翁	3名 本年度全国大会出演曲
	本能寺	小田為若	一世 旭翁	11歳(旭循) 独演
	壇の浦	遠色 玉蘭	一世 旭翁	2名
	那須与市		一世 旭翁	2名
	義士の本懐	遠色 玉蘭	橋 旭翁	3名 本年度全国大会出演曲
	新曲 若き敦盛	西条 八十	橋 旭翁	3名
	新作 川中島	南部露庵?	一世 旭翁?	琵琶3名+NHKアウンサーの語り(に改作?)
	大楠公	飯田 胡春	二世 旭翁	独演(東京)藤巻旭鴻
	湖水渡	遠色 玉蘭	一世 旭翁	旭園・旭蝶
	いつくしまの戦			客演(大阪)山崎旭翠
	須磨の敦盛			講談琵琶(東京)若水桜松
大合奏 黒田節			琵琶14名・箏1名・舞踊立方入り(藤間勘朔)	
ご祝儀 君が代			中村旭園とその孫か?(寛隆12歳)	
第6回 昭45(1970)	蓬萊山		薩摩琵琶歌から移曲?	1名(22歳)+旭蝶・旭嶺
	松の廊下			9歳 独演
	山吹の夢			1名(大学生)+3名(旭園含む)
	壇の浦	遠色 玉蘭	一世 旭翁	21歳(青山泰子)・旭蝶 →旭子初舞台か?
	曹公	遠色 玉蘭	一世 旭翁	九大邦楽部生1名+旭園
	湖水渡	遠色 玉蘭	一世 旭翁	12歳独演(旭清門下)
	桐一葉			橋会 2名(戸畑)
	吉野山懐古	西条 八十	三世 旭翁	12歳(戸畑)・旭蝶
	若き敦盛	西条 八十	橋 旭翁	琵琶3名・歌2名・花柳立方舞踊2名
	秋風故郷山	橋 旭翁	橋 旭翁	琵琶3名・ビクター-歌手(西条仁)
*来の関			錦琵琶(東京)水藤五郎独演	

第6回 昭45(1970)	白虎隊			錦心流独演
	耀生門	佐藤 菊南	三世 橋 旭翁	旭会3名(東京)
	綱細	佐藤 菊南	三世 橋 旭翁	番外 地(旭園)/綱(旭蝶)/叔母(樋口) 他絃3名
	大合奏 お江戸日本橋・五木子守唄・黒田節			花柳の舞踊9名・ピクターの西条他2名の歌 琵琶総勢20数名
第7回 昭46(1971)	猿蟹合戦			2名+旭蝶
	昔公	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	2名+旭子
	新曲 秋風故郷曲	橋 旭翁?	橋 旭翁?	2名+旭蝶
	新作合奏 郷土筑紫節	佐々木 滋寛	中村 旭園	歌5名+旭園・旭坊
	湖水渡	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	2名+旭蝶
	若き敦盛	西条 八十	橋 旭翁	(新曲)2名+旭園
	屋島の善れ(=那須与一)		一世 旭翁	2名+旭蝶
	新曲 遠来曲 天の羽衣	河東素芥菴	三世 橋 旭翁	3名(地・天女・漁夫を語り分け)+旭園・旭坊
	須磨の浦			瑠璃流(歌 白土瑠璃)
	太閤記 第1部			筑前琵琶ファンタジー「大徳寺」「地震加藤」から ナレーター入り 構成:富貴月亭
大楠公	飯田 胡春	二世 旭翁	特別出演(神戸;柴田旭堂)独演	
湖水乗り切り			特別出演 錦心流(東京;石坂南水)独演	
203高地	高田 恵統	橋 旭翁	佐々木旭坊(節範/尹畑)独演	
大物の浦	大沢 逸足	橋 旭翁	旭園(節範/福岡)独演	
白虎隊	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	旭保(節範/小倉)独演 英流 日本舞踊 立方入り	
博多カッチリ節			特別番組 琵琶5名 那の津会社中(おはやし)入り	
第8回 昭47(1972)				
第9回 昭48(1973)				
第10回 昭49(1974)	ご祝儀 博多三番叟	佐々木 滋寛	編曲 嶺 旭蝶	5・7・10歳の3名
	昔公	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	3名(含む旭子)
	藤巴	平田 汲月	嶺 旭蝶	4名(含む旭蝶)
	青の洞門	大坪 華二郎	二世 旭翁	飯田旭忍まよにん(蝶美母)・原原旭潮(蝶美祖母)
	若き敦盛	西条 八十	三世 旭翁	大人4名(含む旭子)
	純情無法松	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	旭蝶・旭子 他1名
	耳なし芳一			編曲 嶺 旭蝶
	壇の浦	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	旭蝶・旭邦
	敦盛		鶴田錦史 作	鶴派錦史会 内山錦栄(札幌;昭48第10回琵琶楽コソ1位)
	茨木	大坪 華二郎	橋 旭宗	山崎旭萃(大阪)独演
	堅田落			若水流琵琶吟宗家(若水桜松;東京)独演
城山			薩摩琵琶正風会会長(安田幸吉;鹿児島)独演	
新作 顔の音(夕鶴より与へうとつう)	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	つう(旭蝶)・与へう(西山)・替手(旭子)	
プロジェクトン'74			創立10周年記念特別演奏 琵琶2名(旭蝶・旭子)+邦楽(鼓)+電子音響(今史朗)	
第11回 昭50(1975)	君が代		嶺 旭蝶	4~8歳の子ども4名
	三つの蝶			9~11歳の子ども4名
	秋風故郷山	橋 旭翁	橋 旭翁	歌1名・琵琶1名(旭子)
	巖流島	平田 汲月	嶺 旭蝶	歌1名・琵琶1名
	子供の為の琵琶と少年合唱団による童謡 しよじよ寺の狸囃子・お猿のかごや			編曲:嶺旭蝶 琵琶8名・ピアノ伴奏・少年合唱・指揮者付
	惟業の月			編曲:嶺旭蝶 琵琶3名+尺八
	純情無法松	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	旭蝶 他1名
	吉野山懐古	西条 八十	三世 旭翁	旭雲・旭蝶
	大徳寺	一世 旭翁	(旭翁の謝り?)	旭子独演
	称小野田少尉生還	萩野 弘	嶺 旭蝶	内田旭潮独演
	「太閤記」より加藤清正			嶺 旭蝶 旭蝶独演
	水や田流筑前琵琶輪曲			
	田村邸名残りの花	水や田 吾洲		京都の奏者2名
敦盛		鶴田錦史 作	薩摩琵琶鶴田流(東京 鶴明会)石坂 鶴朗 独演	
尺八・箏・琵琶・p四重奏 秋のエチュード			今 史朗 琵琶7名+箏1名+尺八1名+ピアノ1名	
ご祝儀 いやさか博多	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	少年部全員	
新作 博多人形	山田 牙城	嶺 旭蝶	5歳と6歳	
三つの蝶			嶺 旭蝶? 7~9歳 子ども4名	
那須の輿市		一世 旭翁	10~12歳 子ども3名+青山旭子	
壇の浦	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	12歳独演	
吉野山懐古	西条 八十	三世 旭翁	歌2名+絃1名(旭子)	

第12回 昭51(1976)	子どもの為の琵琶とVn.の合奏 村まつり・中国地方の子守唄 あんたがたどこさ		嶺 旭蝶?	琵琶10名(含 真由子(=蝶美)) Vn数名・ピアノ1名・指揮者	
	戦艦大和	池上 作三	嶺 旭蝶	旭蝶・旭子	
	白虎隊	遠色 玉蘭	一世 旭翁	旭雲・旭蝶	
	舟新慶 (錦心流曲?)	飯田 胡春	永田 錦心	旭潮 独演	
	西郷隆盛	若生 桂雨	橋 旭宗	筑前琵琶橋会(名古屋)西村旭一 声独演	
湖水乗切	若生 桂雨	鶴田 錦史	鶴派琵琶(東京)半田 鶴朱 独演		
新作 女王聖弥呼筑紫の風	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	琵琶2名(旭蝶・旭子)・篠笛1名・箏1名(安武慶吉)		
ご祝儀 君が代		編曲 嶺 旭蝶	5歳子ども3名		
夜討曾我	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	5~7歳 子ども3名(含 真由子(=蝶美))		
扇の的	今村外園	橋 旭翁	8~10歳 子ども4名		
元寇の乱	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	11~12歳 子ども3名		
城山	勝 海舟	嶺 旭蝶	13歳独演		
第13回 昭52(1977)	藤巴	平田 吸月	嶺 旭蝶	西日本文化サークル(筑前琵琶)・日本舞踊花柳流立方	
	義士の本懐	橋 旭翁	橋 旭翁	琵琶4名(含む 旭蝶)	
	屋島の誉れ		鶴田 錦史	青山旭子 独演	
	安宅の関	飯田 胡春	二世 旭翁	内田旭潮 独演	
	新曲 八甲田山	達 光史	鶴田 錦史	薩摩琵琶?(東京)田中鶴旺 特別出演	
	新曲 立花実山	角屋 寿吉	鶴田 錦史	琵琶2名(旭蝶・旭子)・箏1名(安武慶吉)・茶道南坊流	
	フィナーレ「秋」三章 第1章つき 第2章みのり 第3章まつり		今 史朗	筑前琵琶2名(旭蝶・旭子) 現代邦楽研究会 尺八2パート・箏・三絃・鳴物	
	ご祝儀 君が代		編曲 嶺 旭蝶	大人奏者?3名(含む旭蝶)	
	花咲ちいさん		?	6歳2名 (子ども向けとして作曲)	
	養老の滝	嶺 旭蝶	嶺 旭蝶	8歳2名(含 真由子(=蝶美))	
元寇の乱	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	9~13歳3名		
巖流島の決闘 (錦心流曲?)	石森 克二	山田 錦堂	9~13歳3名		
常陸丸	池辺 義象	一世 旭翁	西日本文化サークル8名(指導 旭蝶)		
親鸞聖人 板敷山	小林 慈宗	橋 旭翁	13歳2名		
石童丸		一世 旭翁	旭蝶他2名		
血達磨	安部 旭洲	安部 旭洲	内田旭潮 独演		
新作 黄金の日々 ルソンの壺	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	青山旭子 独演		
川中島	南部 露庵	一世 旭翁	筑前琵琶橋会(神奈川)押川旭葉 独演 賛助出演		
プロジェクション'74		今 史朗	邦楽+電子音響 旭子・旭蝶 出演 今 史朗後1年		
新説 西院河原 螢草	清水 泰行	嶺 旭蝶	琵琶2名(旭蝶・旭子) 箏1名(安武慶吉)・胡弓1名・語り(劇団員1名)		
第14回 昭53(1978) 旭蝶 嶺演宗家に	ご祝儀 君が代		編曲 嶺 旭蝶	大人奏者?3名(含む旭蝶)	
	花咲ちいさん		?	6歳2名 (子ども向けとして作曲)	
	養老の滝	嶺 旭蝶	嶺 旭蝶	8歳2名(含 真由子(=蝶美))	
	元寇の乱	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	9~13歳3名	
	巖流島の決闘 (錦心流曲?)	石森 克二	山田 錦堂	9~13歳3名	
	常陸丸	池辺 義象	一世 旭翁	西日本文化サークル8名(指導 旭蝶)	
	親鸞聖人 板敷山	小林 慈宗	橋 旭翁	13歳2名	
	石童丸		一世 旭翁	旭蝶他2名	
	血達磨	安部 旭洲	安部 旭洲	内田旭潮 独演	
	新作 黄金の日々 ルソンの壺	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	青山旭子 独演	
	川中島	南部 露庵	一世 旭翁	筑前琵琶橋会(神奈川)押川旭葉 独演 賛助出演	
	プロジェクション'74		今 史朗	邦楽+電子音響 旭子・旭蝶 出演 今 史朗後1年	
	新説 西院河原 螢草	清水 泰行	嶺 旭蝶	琵琶2名(旭蝶・旭子) 箏1名(安武慶吉)・胡弓1名・語り(劇団員1名)	
	第15回 昭54(1979)	夜討曾我	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	7歳2名
		五條橋	三世 旭翁	三世 旭翁	9歳2名(含 真由子(=蝶美))
虎狩			嶺 旭蝶?	10~12歳3名	
関ヶ原			編曲・嶺 旭蝶	14歳2名	
合奏 黒田武士		嶺 旭蝶	嶺 旭蝶	立方 若柳寿菊社中8歳・椎原大雅社中11歳 琵琶15名(大人子ども) + 西日本文化サークル9名	
華道 草の恵み		小樹 文子	三世 旭翁	華道右田碧昇社中10歳2名・琵琶福岡旭社中6名	
君が代			編曲 嶺 旭蝶	京都三美会より3~4歳児2名 + 旭美津	
お伽 舌切雀			嶺 旭蝶?	福岡筑紫旭会7~12歳3名	
花の白虎隊				広島橋会11歳独演	
城山		勝 海舟	一世 旭翁	福岡嶺派15歳独演	
井伊大老 (薩摩系?)				京都三美会1名	
那須与市			一世 旭翁	福岡旭園社中2名	
純情無法松		佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	福岡嶺派3名(旭蝶・旭蝶・旭子)	
太田道灌 (常磐津節から?)			編曲・嶺 旭蝶?	戸畑橋会2名	
那須与市			一世 旭翁	大阪旭華会(奥村旭華)独演	
203高地	高田 恵統	橋 旭翁	小倉旭会2名		
屋島の誉れ		編曲・嶺 旭蝶	福岡嶺派 青山旭子 独演		
壇の浦	遠色 玉蘭	二世 旭翁	福岡嶺派 西山旭邦・嶺 旭蝶		
敦盛	鶴田 錦史	鶴田 錦史	薩摩嶺派(東京)半田 綾子 改め 淳子 独演		
みのりの秋		嶺 旭蝶	琵琶2名(旭子・旭蝶)・ピアノ		
親鸞様		嶺 旭蝶	6歳・8歳 2名		
養老の滝		嶺 旭蝶	8~10歳 子ども3名(含 真由子(=蝶美))		
新曲 寿猿		嶺 旭蝶	10~11歳 子ども3名(含 真由子(=蝶美))		
響れの盆 母里太兵衛	原田 樺夫	嶺 旭蝶	11~13歳 3名? 以下3曲分はプログラムが破損欠落		
博多三番叟					
壇の浦	遠色 玉蘭	一世 旭翁			



第16回 昭55(1980)	立花実山	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	
	合奏曲 妻と兵隊	火野 葦平	嶺 旭蝶	大人子ども計10名
	新曲 ああ惨たりルソン島	小南 正五郎	嶺 旭蝶	旭子+1名
	大徳寺			2名
	教盛	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	青山 旭子 独演
	大柳公			(東京)広瀬 圭穂 賛助出演 独演 (広瀬は無流派?)
琵琶劇 石童丸			琵琶2名(旭子・旭蝶)・笛・立方2名(子どもと大人)	
第17回 昭56(1981)	黒田武士		編曲 嶺 旭蝶	旭蝶+1名
	文福茶釜	内田 旭潮	内田 旭潮	大人2名(湯布院)
	寿猿	嶺 旭蝶	嶺 旭蝶	琵琶3名
	一休さん			琵琶2名
	激流島	平田 吸月	嶺 旭蝶	琵琶2名(含 真由子(=蝶美))
	戦艦大和	池上 作三	嶺 旭蝶	琵琶2名
	常陸丸	池辺 義象	一世 旭翁	大人8名?(含 旭蝶)
	大合奏 博多夜船・博多カッチリ節		編曲:嶺旭蝶?	琵琶総勢28名+博多那の津会社中
	純情無法松	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	原作:若下俊作 旭蝶+1名
	親鸞聖人 板敷山	小林 慈宗	橋 旭紘	琵琶2名
	秋風故郷山	橋 旭翁	橋 旭翁	新人独演
壇の浦	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	独演	
本能寺	小田為岩	永田錦心	鶴派琵琶(東京) 藤内鶴孔 賛助出演 独演	
元寇の乱	佐々木滋寛 帯谷漢之介	嶺 旭蝶	元寇700年記念特別番組 構成・演出野尻敏彦(美術/照明/効果 記載) 出演 琵琶(旭子)・テアトル・ハカタ	
第18回 昭57(1982) 旭蝶・旭園 福岡市文化賞受賞	君が代		<蓬萊山>の移曲の可能性?	4歳+旭蝶
	黒田武士		編曲 嶺 旭蝶	旭蝶+2名
	五條橋			琵琶3名
	義士の本懐(上)	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	琵琶2名(當 嶺秀・飯田宗徳)
	元寇			當 蝶翼・飯田 蝶美
	新作 日原讃歌			島根県日原町婦人部(10名)
	扇の的	今村外園	橋 旭翁	旭子他 蝶延・蝶鶴・蝶玲・蝶雅・蝶春
	養丸の釜 母里大兵衛	原田 種夫	嶺 旭蝶	4名(含 旭蝶)
	安宅の関			3名(蝶華・蝶蓉・蝶香)
	秋風故郷山	橋 旭翁	橋 旭翁	鶴崎嶺定・渡辺嶺楓
	若き教盛	西条 八十	橋 旭翁	梶野蝶玉 独演
	壇の浦	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	渡辺嶺楓 独演
	大徳寺			梶野蝶緑 独演
	小栗栖			青山旭子 独演
湖水乗切	英生 桂雨	永田錦心	鶴派琵琶(東京)今井鶴朝 賛助出演 独演	
合奏曲 みのりの秋		嶺 旭蝶	総勢42名→嶺先生の派閥のみか?(写真参考)	
第19回 昭58(1983)	君が代		編曲 嶺 旭蝶	旭蝶+1名
	博多人形	山田 牙城	嶺 旭蝶	5歳独演
	寿猿	嶺 旭蝶	嶺 旭蝶	3名
	曹公	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	旭蝶+1名
	天草の妻	本多 静雄	嶺 旭蝶	蝶玲他3名
	義士の本懐	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	當 蝶翼・嶺秀 2名
	湖水渡	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	堤 蝶春・橋本蝶雅
	戦艦大和	池上 作三	嶺 旭蝶	蝶華・蝶蓉・蝶香 3名
	吉野山懐古	西条 八十	三世 旭翁	鶴崎 嶺定・青山 旭子
	堅田落			琵琶3名(錦心流か?)
	親鸞聖人 板敷山	小林 慈宗	橋 旭紘	蝶玉 独演
	坂本龍馬			嶺楓 独演
	関ヶ原			蝶緑 独演
	親鸞聖人 石の枕	小林 慈宗	橋 旭紘	青山 旭子 独演
上杉謙信	桑原 八司(元新海線車)	平井 春嶺	薩摩琵琶(京都)平井春嶺 独演 特別出演	
安宅			橋会(大阪)宗範 山崎旭翠 独演 特別出演	
琵琶劇 石童丸			琵琶2(旭子・旭蝶)・立方2(革笛千代之助・リカ)	
第20回 昭59(1984)	黒田武士			男性4名
	扇の的	今村外園	橋 旭翁	6才独演
	虎狩り			琵琶3名
	教盛	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	蝶玲他 琵琶3名
	関ヶ原			蝶華・蝶蓉
	五條橋			蝶雅 独演
	白虎隊	遠邑 玉蘭	一世 旭翁	鶴崎 嶺定・青山 旭子

第20回 昭59(1984)	本能寺			蝶寿・蝶枝
	詩吟 祝賀詞／松竹梅			詩吟 線扇会・啓峰会
	立花東山	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	琵琶1(旭蝶)・第1・茶道お点前 阿刀社中(客人来賓等5名)
	若き敦盛	西条 八十	橋 旭翁	蝶玉 独演
	加藤清正			嶺楓 独演
	耳なし芳一			蝶緑 独演
	俊寛		改編作曲 鶴田錦史	薩摩琵琶(東京)関川昌宏 特別出演
	壇の浦	達色 玉蘭	一世 旭翁	西山旭邦・嶺旭蝶
	義経	村上 元三 改編 達 光史	鶴田 錦史	薩摩琵琶(東京)鶴田錦史他3名 特別出演
	猿の音(夕鶴より)とへうとつう	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	演出 舟越節・琵琶2(旭子・旭蝶)・立方1(花柳美女)
第21回 昭60(1985)	源平義経弓流し			旭蝶他 男性4名
	敦盛	達色 玉蘭	一世 旭翁	8才 2名
	小督局			蝶玲他2名
	那須の与市		一世 旭翁	7才 独演
	若き敦盛	西条 八十	橋 旭翁	青山旭子・飯田蝶美・橋本蝶雅
	壇の浦	達色 玉蘭	一世 旭翁	旭蝶・鶴崎嶺定
	椎葉の月		編曲:嶺旭蝶	琵琶2(蝶枝・嶺定)・尺八1(安石雲峰)
	船弁慶			嶺楓 独演
	俱利伽羅峠			三美会(京都)吉田旭伶 賛助出演
	平経正			三美会(京都)田中駒水 賛助出演
第22回 昭61(1986)	新平家物語	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	琵琶2(旭子・旭蝶)・第1(二階堂秀華)・語り(テアトル・ハカタ)
	御祝儀 博多三番壺	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	旭蝶他 8才(川浪蝶翔)を含む8名
	博多人形	山田 牙城	嶺 旭蝶	6才 3名
	藤巴(黒田武士)	平田 吸月	嶺 旭蝶	10才 2名
	壇の浦	達色 玉蘭	一世 旭翁	嶺楓・義信・武一・英哲・正善(正幸の語り?)
	常陸丸	池辺 義象	一世 旭翁	蝶玲・蝶花・蝶苑
	元寇	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	蝶翔 独演
	巖流島	平田 吸月	嶺 旭蝶	蝶美 独演
	野村望東尼		嶺 旭蝶	
	純情無法松	原作: 岩下俊作 佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	蝶玉・旭子
第23回 昭62(1987) 旭蝶 芸道70年	菅公	達色 玉蘭	一世 旭翁	旭蝶・鶴崎嶺定
	博多米一丸			蝶緑 独演
	新作 広田弘毅	北川 晃二	嶺 旭蝶	嶺楓 独演
	琵琶劇 石童丸			旭子・旭蝶・立方2(花柳美女)と子方6歳(テアトル・ハカタ)
	松の廊下			蝶翔9歳・英三郎11歳
	赤垣源蔵	村上 桂秋	橋 旭翁	青山節子7歳・熊代紀章7歳・天野貴美子9歳
	寺坂吉右衛門		(新曲琵琶歌)	正善・英哲17歳
	田村郎		(錦心流?)	旭蝶・蝶苑・蝶花・蝶玲
	大高源吾			蝶翔9歳 独演
	間 十次郎			蝶美16歳 独演
第24回 昭63(1988)	新作 赤穂城明け渡し	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	旭蝶・鶴崎嶺定
	新作 大石東下り	角屋 寿吉	嶺 旭蝶	蝶江・旭子
	南部坂雪の別れ		(錦心流?)	嶺楓 独演
	義士の本懐	達色 玉蘭	一世 旭翁	琵琶2名(旭子・旭蝶)・第1名(二階堂秀華)
	特別番組 耳なし芳一 1957年度全国8より映画コンテスト特選			製作:嶺栞生 協力:あかま神宮宮司、戒壇院住職・琵琶(吉塚旭真堂)
	ご祝儀 博多三番壺	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	嶺楓・義信・幹雄・嶺定・旭蝶・旭子
	五條橋(長唄/義大夫から移曲?)			8歳(節子)・10歳(貴美子)・旭蝶
	元寇	佐々木 滋寛	嶺 旭蝶	10歳(蝶翔)・12歳(英三郎)
	誉れの盃 母里太兵衛	原田 種夫	嶺 旭蝶	3名(蝶玲・大塚崎子・旭蝶)
	菅公	達色 玉蘭	一世 旭翁	蝶苑・蝶花
第25回 昭64(1989)	若き敦盛	西条 八十	橋 旭翁	10歳(蝶翔)独演
	戦艦大和	池上 作三	嶺 旭蝶	2名(蝶華・蝶響)
	椎葉の月		編曲:嶺旭蝶	旭蝶・鶴崎嶺定+尺八1(安石雲峰)
	博多米一丸		編曲:嶺旭蝶	蝶枝・旭子+尺八(雲峰)
	大徳寺		薩摩系曲?	嶺楓 独演
	新作 風林火山	辻 有水 改編 嶺 旭蝶	嶺 旭蝶	琵琶2名(旭子・旭蝶)・詩吟(渡辺嶺楓)・武田節(鶴崎嶺定) 第1名(二階堂秀華)・尺八(安石雲峰)

### 3. 初代会主嶺旭蝶について

筑前琵琶保存会の発足を最も強く促したのが、奏者の嶺旭蝶であったことは既に述べたが、発足当初から保存会の性質やその活動内容に色濃く影響を与え、発足十年目の昭和 49(1974) 年より「会主」となった嶺旭蝶とはいかなる人物であったのか。金子の聞き書き<sup>7</sup>から読み取れる、保存会発足までの嶺旭蝶の来歴にも触れておこう。

嶺旭蝶（本名 嶺スミ子）は明治 44(1911) 年 11 月 25 日、現在の北九州市八幡東区枝光で、父八十九郎と母キンの第四子として生まれた。長崎で貿易商勤めの経験がありハイカラで社交的なものを好み、趣味で義太夫や浪曲を嗜む父の奨めで、折しも大流行期にさしかかっていた筑前琵琶を、旭会の久我旭昇に 7 歳で入門して始めている。師の旭昇は、旭蝶の入門時に 30 代半ばで、すでに少女の弟子が 20 人以上、他にも八幡の製鉄工の男性の弟子も多数いたという。入門の翌年には、当時東京を主な拠点としながら生家のある博多赤間町にも稽古場を構えて居た初代旭翁が来福して八幡で催した舞台演奏に出演して初舞台、9 歳で芸名（雅号）の「旭蝶」、13 歳には「法翼山」という法山号すなわち教授の資格も得て、教授を始めるようになった。自分より年長の弟子を率いて、八幡の製鉄祭などで流しも演奏した。昭和 3(1928) 年 18 歳の時に、代々木の日本青年館で行われた旭会全国大会に福岡八幡地区の代表として出演するため初めて上京し、全盛期の筑前琵琶の上演に参加すると共に、全国区で異種目と共演する華やかな舞台や筑前琵琶に関わる各界の人物を目の当たりにし、その後およそ一年間東京赤坂の親戚宅で、筑紫旭一臣のもとに稽古に通いながら生活している。昭和 5(1930) 年には八幡へ帰郷するが、昭和 6 年の満州事変から国内が一気に戦時体制になり、はじめのうちは戦意高揚の曲目で演じ続けた琵琶も戦時下の音曲自粛で教習・上演共に難しくなって琵琶では生計を立てにくくなり、旭蝶は実家付近で喫茶店を営み始める。昭和 7(1932) 年 22 歳の時、婿養子をとる形で電気会社勤務の正実と結婚し、喫茶店から旅館業へと家業を移行。戦後、昭和 24(1949) 年に博多へ移転し、旅館幸村を開業。戦後の復興期に博多を訪れる実業家や政治家、ジャーナリストや文士達との交流を広げ、時代の出来事や心情を活かした新しい琵琶歌の創作を手がけ始める。昭和 30(1950) 年に旭会全国大会が初めて筑前琵琶発祥の地とされる福岡で開催

されたが、この大会を福岡での開催にこぎつけたのも旭蝶の力に依るものだったようだ。しかし、世間は戦後にメディアを通じて普及し出した洋楽の流行におされ、伝統的な響きの音楽は自然淘汰されかねない流れにあったため、この全国大会開催を機に、旭蝶の中では福岡で筑前琵琶の伝承を守り支える組織を作る必要を強く感じていたようである。

#### 4. 筑前琵琶保存会の発足と会主嶺旭蝶の経緯

嶺旭蝶の琵琶奏者としての才能と経験、人脈が活かされて発足した筑前琵琶保存会は、地元福岡周辺の若手からベテランの奏者に関西各地や東京からの客演者を招き入れ、全国的に展開する筑前琵琶の発祥が福岡であることや、旭会の宗家が作り伝承してきた名曲の数々を、華やかな舞踊や演芸も挟みながら普及するプログラムで始まったことがわかるが、発足から10年目の昭和49(1974)年から嶺旭蝶の作編曲の上演が急増する。この年のプログラムには、それまで無かった「会主」という肩書きで嶺旭蝶が挨拶文を掲載しているが、矢野の調査によれば、旭蝶が会主となったのは昭和47(1972)年からのことだという。(昭和47・48年の第8・9回のプログラムが未見のため、筆者は未確認。)

矢野によると<sup>8</sup>、保存会定期演奏会での演奏をはじめとする旭蝶の演奏活動においては、新作は勿論、既存の旭会宗家作の楽曲にも、旭蝶は錦心流などの薩摩琵琶系の表現を取り入れ、筑前琵琶の芸能としての活性化のために新しい響きや新しい歌詞の創作に躊躇しない姿勢が次第に強くなっていった。そのため一方で旭会としての芸風を大きく変えずに守ることをも重視していたもう一人の名手中村旭園との間に方向性の違いが顕れた。そういった背景から保存会の方向性に否定的になった旭園側が保存会の散会を宣言するものの、旭蝶の周辺で保存会の継続を望む者が旭蝶を「会主」とし、福岡市長に就任した進藤一馬に代わって衆議院議員の中村虎太を会長に据えて継続することとなったと見られる。

旭蝶は、保存会発足の6年目の昭和45(1970)年第6回の演奏会から弟子を出演させているが、そこで初舞台を踏んでいるのが青山泰子のちの旭子である。青山泰子は入門直後の初舞台時にプログラムに21歳とあるが、博多住吉の詩吟教室で評判となっていた美声に目をつけた詩吟界の知人からの紹介で旭蝶の

後継者の一人として弟子入りし、持ち前の芯の強さで熱心に稽古に励んで旭蝶の期待に応え、第7回の演奏会では旭蝶が尊敬する琵琶奏者高倉旭子の名前を雅号に戴いて出演をしている。旭子は、かねてより旭蝶と交流があって保存会の演奏会にも継続的に一派から客演を招いていた薩摩琵琶錦心流の、鶴田錦史に、昭和52(1977)年上京時に演奏を聴いてもらい、錦史の高い評価を受けてその後2年間に東京の鶴田の元へ通って稽古を受け、旭子が鶴田から得た芸風は、旭蝶の芸風や作風にも影響を与えることとなる。



青山旭子(左)と嶺旭蝶(右)  
昭和50年代のどんたくか？

## 5. 筑前琵琶保存会のその後と本研究の今後

現在の筑前琵琶保存会の演奏会には、筑前琵琶の言わば古典としての初代・二世・三世旭翁の作品以外に、嶺旭蝶や青山旭子の作品が数多く演奏されている。その作品には、嶺旭蝶が20代から人脈を温めてきた、九州の歴史や文芸に通じる文人達<sup>9</sup>の作詞が活かされ、北部九州に伝わる地域の逸話を伝えるものや、子どもたちが琵琶楽に親しめるような楽曲、戦前・戦後の時代の様々な心情を表現した作品、という昭和中後期独自の筑前琵琶歌作品群を為している。

また、筑前琵琶保存会の演奏普及活動を通じて嶺旭蝶に入門した演奏者の多くは、昭和53(1978)年に旭蝶が旭会から抜けて以降は、「蝶」の字を載せた雅号(芸名)で出演するようになり、中には自作の新作曲を携えて全国琵琶楽コンクールに挑み、評価を得た者も出てきている。現在三代目の会主となった寺田蝶美は、祖母が安原旭潮、母が飯田(旧姓内田)旭忍といずれも九州旭会の琵琶奏者で、幼少時から祖母と母の手ほどきを受けると同時に嶺旭蝶の教えを受け、旭会の伝承と嶺旭蝶独自の新しい芸風や作品のいずれをも学んだ弟子の一人なため、旭会が重んじる古典的な名曲に共通に見られる筑前琵琶の基礎技法と、旭蝶や旭子が重視した時代の好みや流行をも取り入れた創作のあり方を、福岡を拠点に、地元福岡の力によって追求しようとしている。

そこで筆者は、今後もこの50余年筑前琵琶保存会が演奏発表してきた嶺旭

蝶や青山旭子の創作した作品群の詳細な調査と記録作成、また保存会が定期演奏会以外の場でも行ってきた祭礼行事や式典等での種々の奉納や囃子や記念上演のかたちと趣意を丁寧に調査することを継続したい。

## 注釈

<sup>1</sup>山本百合子「筑前琵琶研究序説」『ミクストミューズ』No.14（2019）愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース紀要 17～27p.

<sup>2</sup>郷土史研究家 矢野信保による調査メモ「筑前琵琶保存会を理解するために」および第5回プログラムによる

<sup>3</sup>第1回のプログラムは実物の確認ができておらず、現時点では前掲の矢野信保の調査メモによる

<sup>4</sup>筑前琵琶保存会 第56回定期演奏会プログラム 36p.

<sup>5</sup>金子厚男『琵琶という二字 聞き書き・嶺旭蝶の60年』筑前琵琶保存会発行 昭和58年 50p.

<sup>6</sup>前掲書 50～51p.

<sup>7</sup>前掲書

<sup>8</sup>注釈2の矢野による調査メモ

<sup>9</sup>一覧表の嶺旭蝶作曲作品の作詞者に見られる、佐々木滋寛・平田汲月・角屋寿吉・萩野弘・山田牙城・池上作三・原田種夫・火野葦平・小南正五郎・本多静雄 他。

## 参考文献

「筑前琵琶保存会 定期演奏会プログラム」第2～56回 昭和40(1965)年～令和2(2020)年

金子厚男『琵琶という二字 聞き書き・嶺旭蝶の60年』筑前琵琶保存会発行 昭和58(1983)年

矢野信保 編「筑前琵琶保存会を理解するために」調査メモ 平成24(2012)年 筑前琵琶保存会事務局発行

『邦楽曲名事典』平凡社 平成6(1994)年

\*本稿に掲載の写真は、寺田蝶美所蔵のものを借用した。